

秋建時報

<http://www.a-kenkyo.or.jp>

秋建時報

平成26年12月1日(第1247号)



発行／(社)秋田県建設業協会

秋田市山王四丁目3番10号

TEL 018(823)5495

FAX 018(865)2306

県協会

秋田県建設雇用・構造改善推進大会

建設雇用改善優良事業所など表彰



11月25日、秋田ビューホテルで秋田労働局、秋田県、(社)秋田県建設業協会主催による平成26年度秋田県建設雇用・構造改善推進大会が開催され、関係者120人余りが参加した。

大会は2部構成。第一部では、防災システム研究所の山村武彦所長を講師に迎え「大規模災害に備える組織とリーダーの防災・危機管理」をテーマに講演が行われた。第二部では冒頭、主催者として労働局より木下和也職業安定部長、秋田県から産業労働部岩澤道隆次長、(社)秋田県建設業協会から村岡淑郎会長からあいさつがなされた。その中で村岡会長は「建設業を取り巻く環境は、公共事業関係予算の増額、設計労務単価の二度にわたる改訂、低入札価格調査の見直しなどが行われ建設労働環

境が少しずつだが上向いてきている一方、建設業就業者の減少と高齢化、若年者の入職の減少や技能者不足による次世代への技能・技術の継承が大きな問題となっている。建設業がさらに発展していくには、経営体質と技術の強化、人材の確保・育成を図っていくことが極めて重要である。」と述べた。引き続き来賓の鈴木木東北整備局秋田河川国道事務所長が「建設業界の厳しさは底を打った感があるが、予算はピーク時の3分の1程度しかない。全国で大規模災害が頻発し、社会資本の老朽化も進む中、雇用を守り安全安心な地域づくりや地域活性化に寄与する建設業の役割は大きい。」とあいさつ。その後、国土交通大臣顕彰や秋田県知事表彰などが執り行われた。

受賞者は次の通り(敬称略)。

■ 国土交通大臣顕彰（優秀施工者）

安達 作美 ((株)堀川)	信太 廣司 (大森建設(株))
五十嵐 暢 ((株)秋田デックライト)	田中 芳夫 (高吉建設(株))
太田 久和 ((株)加賀昭塗装)	千葉 光寿 ((株)瀧神巧業)
近藤 征一 (大信太工業(株))	豊村 浩行 ((有)北秋カッター興業)
今野 弘 ((有)コンノ製作所)	西野 章 ((株)フジペン)
佐藤 長栄 ((株)ヤナギヤ)	柳田 貢 ((株)丸茂組)

■ 秋田県知事表彰（雇用改善優良事業所）

(株)高作（代表 高橋俊一）

■ 秋田県知事表彰（優秀建設現場従事者）

高橋 正利 ((株)最上田組)	菊地 聖悦 ((株)上杉組)
三熊 重光 (斎藤建設(株))	松田 猛 ((株)菅与組)
藤原 正美 ((株)小笠原組)	成田 聡 (東光鉄工(株))
佐藤 秀樹 (小坂工業(株))	藤川 一男 ((株)秋田県南重機)

■ (一社)秋田県建設業協会会長表彰（雇用改善優良事業所）

(有)米広組（代表 薄井 忠尚）	(株)荒屋舗建設（代表 荒屋 舗勉）
(株)岡部建設工業（代表 岡部 秋男）	(株)伊藤組造園（代表 久米 君雄）
(株)大友組（代表 大友 輝夫）	

■ (独)勤労者退職金共済機構理事長表彰

(株)宮原組（代表 宮原 竜也）	(株)丸臣高久建設（代表 高久 臣平）
------------------	---------------------

建退共秋田県支部

理事長表彰

普及・履行確保等の功績を称えて

勤労者退職金共済機構では、10月を「加入促進強化月間」と定めており、本制度のより一層の充実を図ることとしております。

その加入促進強化月間の一環として、本制度の趣旨である普及徹底、加入促進及び履行確保に積極的に貢献し

ている建設業退職金共済制度普及協力事業所として、(株)宮原組、(株)丸臣高久建設が理事長表彰を受賞。11月25日秋田ビューホテルで開催された平成26年度秋田県建設雇用・構造改善推進大会において、村岡淑郎秋田県支部長より表彰状及び記念品を伝達されました。

株式会社 宮原組	代表取締役	宮原 竜也	大仙市
株式会社 丸臣高久建設	代表取締役	高久 臣平	湯沢市



秋田・鉄路の情景

Vol.
25

「宴会列車が行く！」

秋田内陸縦貫鉄道



文と写真／加藤隆悦

フリーカメラマン兼フリーライター
取材・執筆歴／旅の手帖、WoodyLife、
ベンチャー・リンク、郷、ある他
海外取材歴／ドイツ、アメリカ、ブラジル
写真塾・写楽 主宰／写真教室、撮影ツアー
企画等

秋田内陸縦貫鉄道には、貸切用のお座敷車両がある。車内は全面畳敷きと掘りごたつ風の二通りのアレンジが可能で、最大定員は40名。占有スペースに余裕を持つなら20名から30名くらいが手ごろだが、この車両の貸切料金は案外リーズナブルだ。角館～鷹巣間を往復で利用した場合は6万5千円。20人で利用して頭割りにすれば一人当たり3250円だ。

同区間を普通列車で往復すれば3340円だから、仲間が20人も集まればかえって安上がりだ。

私事ながら、過日筆者が所属するグループでこのお座敷車両を利用した。メンバーの居住地がまちまちなので、利用は角館から鷹巣までの片道とし、出発地までの集合と到着地からの帰路はそれぞれ自腹で移動してもらうことにした。飲食物は各自の持ち込みだ。

この貸切お座敷車両での「移動宴会」は、当初自分たちで想像していた以上に楽しいものになった。仲間内での「遠足気分」で話が弾み、流れる車窓風景にはほとんど関心が示されず(それは誤算だったが)、あつという間の2時間ほどの鉄道小旅行だった。

途中列車は、阿仁マタギと比立内の間の比立内鉄橋と、笑内と萱草の間の大又川鉄橋の上で徐行して、高い鉄橋から谷間を覗き込む眺望をサービスしてくれる。他の客はいないから堂々と窓を開けて景色を楽しみ、写真に収める。

このお座敷車両の旅には、関東や仙台などの県外在住メンバーも4名参加して、みんな大満足して帰っていった。

山間地を走る秋田内陸縦貫鉄道は、沿線住民にとってはかけがえのない生活路線であるが、同時に、鉄道好きな人や旅行好きな人には魅力にあふれた路線でもある。その部分でのアピールが、残念ながらもまだ十分ではないような気がする。

赤字続きで存廃が常に取りざたされているが、やり方次第ではまだまだ伸び代があるのではないかと考える。この路線自体が、秋田県の貴重な観光資源であるとも言える。

いついつまでも走り続けてほしい秋田内陸縦貫鉄道だ。

秋建時報の思い出

藤原優太郎

一人のご老人と最初に会ったのは1992年（平成4年）、今から22年前だった。建設省（現国土交通省）東北地方整備局・森吉山ダム工事事務所から依頼を受け、『森吉山麓風土記』というダムに沈む村々の記録をまとめる仕事が自分に任された時のことである。

その中で「ふるさと森吉を語る」章立てで、「前田村小作争議の顛末」を聞き書きしたのが旧前田村在住の藤嶋岩雄さん（旧姓徳永岩雄・当時92歳）という方であった。

藤嶋老人とは奇しくもその後、『秋田県建設業協会60年史』をまとめる仕事で再び取材をする機会があったが、前田村（旧森吉町・現北秋田市）の小作争議は昭和の初め、前田村五味堀で勃発した大騒擾事件であった。当時の農民運動を指導していたのが可児義雄で氏亡き後を継いだのが藤嶋さんで、当時は全農や社会党の書記局にいたという。

一大騒擾事件の舞台となった五味堀に残っている可児義雄の記念碑はのちに藤嶋さんを主宰とし、苦しみを体験した農民たちの手で建てられたものである。小作争議が終結したあと五味堀にあった争議団事務所の建物は最後の指導者であった藤嶋岩雄さんに提供され、小又川流域の細越に氏の住宅として再建されたものという。ぼくが取材に伺ったのはこの家であった。建物には農民たちの魂が込められ、入口の事務所スペースには難しそうな書籍がたくさん並んでいた。

藤嶋老人と二度目にお会いしたのは、翌平成5年であった。社団法人秋田県建設業協会が60年記念史を発刊するに際し、その編集のお手伝いをした時のことである。同記念史に「座談会／戦時下の土建業界を語る」という一項が設けられ、戦前の同協会事務局長を務められた藤嶋さんに、鷹巣町（現北秋田市）の旅館でいろいろなお話を伺った。座談会には当時の協会副

会長の酢屋潔さんと協会次長（当時）の鈴木義広さんも同席していた。

藤嶋老人は、明治33年福岡県の生まれ。昭和8年に秋田に来て以来、前田小作争議の後始末をしたり農業組合の指導などをしてきた。昭和14年、当時の秋田県土建協会北林庄作理事長の知遇を得て同協会に奉職。2年半にわたり統制強化された多難時代に、協会の事務局長として業界発展のために持ち前の旺盛な行動力をもって尽力した。

昭和15年、業界に新風をもたらした「秋田県土木建築工業組合」設立に当たっては北林理事長のもとでその創立準備から設立認可に至るまで有資格者の統合、官庁との折衝、また認可後の組合出資払込など難しい事務を的確に処理した手腕は誰しも認めるものであった。その頃の協会や藤嶋さんの活躍ぶりは60年史の座談会の項に詳しく載せられているのでぜひご覧いただきたい。

藤嶋さんに二度お会いしたあと数年も経たないうちに亡くなられたという報せを受けた。戦前から戦後にかけて動乱の時代、若き戦士として日本のみならず、協会から派遣され中国張家口まで行って働いたという。もっとたくさんのお話を伺いたかったのだが、それは叶わなかった。

『協会60年史』を編纂した折、事務所に眠っていた膨大な資料となる「秋建時報」の古いタブロイド版新聞を見せられ、秋田県の土木建築の歴史を垣間見ることができたのは、自分自身の知見を広める意味で非常に貴重な体験となった。その後、「随想」や「秋田県土木建築の近代化遺産」の執筆ページを当たられたことは自分の生涯の宝として残された。

秋建時報が最終版を迎えると聞いて、偉大な先人たちの足跡をたどり、その人物像を窺い知ったことはまさに僥倖といえる。

長い間、本当にお世話になりました。厚くお礼を申し上げます、これからの協会のますますの発展を願ってやまないものである。ありがとうございました。